


1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

普及啓発・公益増進 部門

氏名又は 団体名称	こうえきざいだんほうじん にっぽんざいだん 公益財団法人 日本財団	
所 属		
功績の概要	多年にわたる海洋に関わる多面的かつ先駆的な諸活動	
功 績 事 項		
<p>1. 「海の世界の人づくり」事業として、世界の研究機関や大学、政府、国際機関等と連携し、117 カ国、800 人以上の人材を育成。また、東京大学等の国内大学における学際型講座の開設や海上保安大学校におけるアジア各国の海上保安機関職員への研修プログラムの設置など、幅広い人材育成活動を実施している。</p>		 <p>「海の世界の人づくり」事業奨学生</p>
<p>2. 40 年以上にわたりマラッカ・シンガポール海峡の航行安全・環境保全活動に従事し、「マ・シ海峡協力メカニズム」の構築及び「マ・シ海峡航行援助施設基金」の設置に尽力した。</p>		 <p>マ・シ海峡へのブイ(浮標)の設置</p>
<p>3. 2005 年に「21 世紀の海洋政策への提言」を日本政府に提出、海洋基本法の制定と海に拡大した国土の管理の重要性を訴えた。これが契機となって、2007 年には海洋基本法が制定、2008 年には海洋基本計画が策定された。</p>		
<p>4. 海の利用者と地域を結び、多様なつながりを生み出す窓口となる「渚の交番」プロジェクト(全国 8 地域)の推進や、水上バイクの特徴を生かした海洋教育、安全啓発活動などを行う「Sea Bird」プロジェクト(全国 12 地域)を展開している。</p>		 <p>宮崎県・青島の渚の交番</p>
<p>5. 日本中小型造船工業会を通じて造船技能開発センターを設立し、造船技術の伝承に貢献している(約 3000 人が受講)。また、日本造船協力事業者団体連合会を通じて造船所職員に対する安全体感教育を実施し、事故発生率の減少に大きな成果を上げている(約 6500 人が受講)。</p>		 <p>造船技能開発センターでの研修</p>
<p>6. 東日本大震災に対する海の復興支援として、被災船舶や被災造船関連事業者等のための緊急融資・再生支援や、海洋関連高校への教習艇等支援など、産官学の連携による多様な事業に積極的に取り組んでいる。</p>		 <p>被災船舶への緊急融資による新造船</p>

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

科学技術・学術・研究・開発・技能 部門

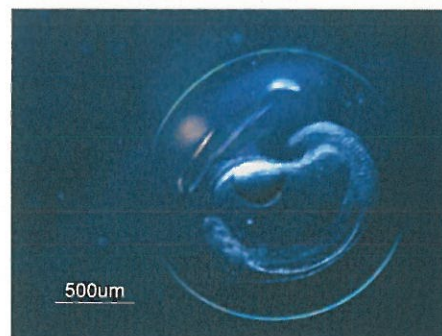
氏名又は 団体名称	つかもと かつみ 塚本 勝巳	年齢	64	
所属	日本大学			
功績の概要	ウナギの産卵と回遊に関する研究			

功 績 事 項

1. 海洋生物学に残された最大級の謎であるウナギの産卵場を明らかにした。
2. 生物学のみならず、海流や海底地形など海洋科学に関する知見を総合し、ウナギの産卵時期を特定する「新月仮説」と場所を特定する「海山仮説」を構築した。
3. グリッドサーベイ法や船上遺伝子解析による種同定など、新たな手法を研究航海に導入し、史上初のウナギ卵を採集することにより西マリアナ海嶺南部にウナギの産卵場があることを特定した。
4. 北赤道海流と黒潮による仔魚の回遊メカニズムや外洋における初期生活史など、次々と先駆的な研究成果を発表した。
5. ウナギ産卵場の一角にある無名の海山を、その調査に当たった静岡県水産試験場の調査船駿河丸に因んで「スルガ海山」と命名した。現在 Suruga Bank として国際的に認められている。
6. 研究成果を計 600 編以上の学術論文として出版するとともに、小学 4 年生の国語の教科書に科学読み物「ウナギの謎をおって」を執筆し、海洋科学の発展と普及に大きく寄与した。




ニホンウナギ *Anguilla japonica* の産卵場（星印）と仔魚の輸送経路。



人類が初めて目にしたニホンウナギの卵。2009年5月22日未明、新月の2日前に西マリアナ海嶺南端部の海山域で採集された。

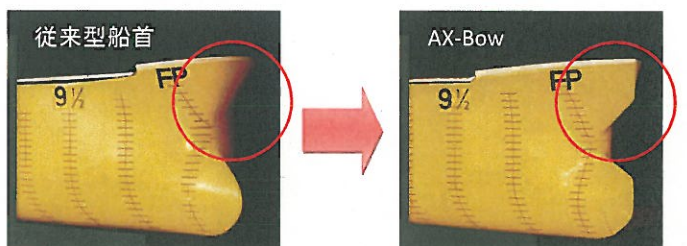
1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

科学技術・学術・研究・開発・技能 部門

氏名又は 団体名称	ないとう しげる 内藤 林	年齢	69	
所属	大阪大学名誉教授			
功績の概要	船舶の実海域推進性能の先駆的研究			

功 績 事 項

- 1970年代までは、波に起因する船舶の抵抗増加の影響は、船舶の推進性能の改善に対して顧みられることが少なかった。そのような中で、波のある実海域における船舶の推進性能の重要性に早くから着目し、波浪中抵抗を効果的に低減させるためには水面近傍の船首船型が重要であることを、世界に先駆けて理論的、実験的に明らかにしてきた。この成果は、波浪中抵抗増加の低減効果を有する船型開発につながり、2000年以降に建造された多くの大型貨物船に対して実用化され、実海域の船舶の省エネルギーに大きく貢献している。
- 2000年の初めまでは日本造船研究協会が中心となり、国内の主要造船企業と大学が参加して共同研究が実施され、実海域推進性能の推定の計算技術が研究・開発されてきた。しかし、その成果である計算コードなどは、各所に散在した状態で広く一般に利用されているとはいえなかった。それらを一か所に集約し、インターネット網を通じて利用できるシステムを構築した。これにより、計算コードを常に最良、最新の状態で維持管理できるとともに、いつでもどこでもだれでも利用できる環境が実現した。現在、本システムは、この分野の研究者や技術者に広く利用されている。
- 実海域の複雑な波を精度よく長時間にわたり再現できる要素型造波吸収装置を全周に配置した波浪水槽を世界で初めて開発した。その概念をもとに、独立行政法人海上技術安全研究所の実海域再現水槽(2010年完成)が実用化された。さらに、三井造船昭島研究所にて実験水槽として製品化された。この水槽は、実海域の複雑な波の中での船の挙動や性能推定の研究に大きく寄与している。




NKK (現ジャパン マリンユナイテッド) との省エネ船首形状の開発。その後の各社の船首形状開発に大きな影響を与えた。



実海域再現水槽の開発。造波性能の評価のために、一例として水面に波で文字を描いた。

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

地域振興 部門

氏名又は 団体名称	あべ よしたか 安部 義孝	年齢	72	
所属	アクアマリンふくしま			
功績の概要	水族館を通じた地域振興と震災復興への貢献			

功 績 事 項

1. 「海を通して人と地域の未来を考える」という理念のもと環境水族館として、併せて五感に訴える体験を重視した水族館の館長として、地域に根ざし開かれた施設づくりの一環として、ボランティアの導入を積極的に進めてきたほか、地域の交流、集客の拠点として環境整備に努めるなど、特色ある施設運営をしてきた。
2. 地域振興の一助として「うおのぞき子ども漁業博物館」を地元の漁業組合と協働して開設。海洋保全、水産振興、魚食普及など多彩かつ個性的な展示ソフトを開発したほか、無名な魚種(マルアオメエソ)を市の魚に仕立て上げ、地域振興及び魚食普及にも貢献。
3. シーラカンスの生態調査を精力的に進めており、その過程において生息地域住民との海洋生物に関する情報の共有を通して、インドネシアマナド地域の海洋系大学、そして政府機関と協働して地域振興のため海洋保全の一役を担うなど、日本だけでなく国際的に海洋保全を通して地域振興に寄与した。
4. 東日本大震災・原子力災害により、深刻なダメージを受けた施設の復旧や生物の避難について、日本全国のみならず海外の水族館からの支援と協力、多くのボランティアと力を合わせることで、わずか4ヶ月という驚愕のスピードで再オープンを果たす。このことにより、地域の復興のシンボルとなり、小名浜港や福島県のみならず、全国そして海外に地域の復旧復興を示した。また、地震と津波災害を「わくわく里山プロジェクト」として反映させ、水族館施設の周囲に盛土して防潮堤を整備し、その中に縄文弥生時代まで懐古した「里山」を再現することを提唱した。これを推進する財源については、長年にわたり交流と親交を続けてきたクウェート国からの寄付金300万ドルが実現している。



ボランティアによる震災復興活動




「がれき座」における再オープンイベント



シーラカンス調査風景

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海洋に関する科学技術振興 部門

氏名又は 団体名称	<small>こくりつきよくちけんきゅうじょかいようどうぶつけんきゅう</small> 国立極地研究所海洋動物研究チーム <small>ないとうやすひこ さとうかつふみ たかはしあきのり</small> (内藤靖彦、佐藤克文、高橋晃周)	
功績の概要	海洋生物に関するバイオリギング手法 の開発と水中行動・生態の解明	

功 績 事 項

1. 小型かつ多機能な行動・環境情報記録計を海洋生物に直接とりつけて観測を行う「バイオリギング」手法を世界に先駆けて開発し、この手法による海洋生物の研究を、国内外の研究者との共同研究として推進した。
2. 海生哺乳類、海鳥類、ウミガメ類、魚類など 100 種以上の生物に対してこの手法を適用し、高精度の行動・生態情報を取得することに成功した。様々な海洋生物が大きな体サイズの違いにもかかわらず秒速 2 メートル程度で遊泳することを豊富なデータに基づき世界で初めて実証するなど、水産資源重要種を含む海洋生物の水中行動生態について新知見を得た。
3. 海洋生物は直接観察することが難しいため、水中の行動生態に関する従来の知見は限られていた。本成果は、我が国の小型電子技術を活用した記録計を用いることで、海洋生物の行動生態の直接的な計測にブレークスルーをもたらした点が特徴である。
4. 本成果は海洋生態系に関する情報の高精度化に大きく貢献し、世界の様々な海域において海洋生物資源の保全・利用に寄与すると期待される。また海洋生物の未知の行動や生態を明らかにし、社会にわかりやすく発信することで、科学への関心を高めた。



画像記録計を装着したペンギン
(左上)とアザラシ(左下)

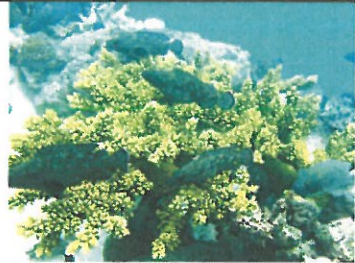
【記録計から得られた画像】
ペンギンが魚を捕らえる瞬間
(右上)

海氷下で母親の後ろを泳ぐ
アザラシの子ども(右下)

バイオリギング手法により「動物の目線」で行動・生態を観測することが可能になった。

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

水産振興 部門

氏名又は団体名称	や え や ま ぎ よ ぎ よ う き よ う ど う く み あ い 八重山漁業協同組合	
所属		
功績の概要	「島人(しまんちゅ)の宝」 ～豊かな海を守る取組～	

功 績 事 項

1. 日本最大級のサンゴ礁海域である石西礁湖等において、そこに生息するフエフキダイ類やハタ類、ブダイ類等、全国でも稀な40種以上にわたる魚種の資源回復を図るため、主要産卵場を保護区として設定し、産卵期の禁漁を行うとともに、若齢魚保護のため漁獲サイズを制限し、資源管理型漁業を実践することにより、著しい減少傾向にあった資源の減少がほぼ横ばいとなり、一定の歯止めをかけた。
2. また、サンゴ礁の天敵であるオニヒトデ駆除活動や海底清掃などを始めとして、漁場環境保全の活動を、地域の中核となり、一般市民、遊漁者やダイビング業者、国、県、市町等と強い連携をもって行った取り組みは、珊瑚礁生態系の保全に貢献し、多数報道されるなど、大いに注目されている。
3. さらに、体験漁業や観光漁業を積極的に実施するとともに、毎年開催する小中学生等を対象とした「お魚まつり」等を通じて、環境教育を推進するとともに、地域の活性化に大きく貢献した。

※右上イメージ写真: 撮影(独)水産総合研究センター

① 産卵保護区の設定～魚のお母さんを守ってね！～ 産卵が集まってくる魚を保護し、資源の回復を目指します

下記の保護区内では、4～6月の3カ月間、漁や釣りを自粛してください！



2 体長制限

～ちいさな魚をまもってね！～

未熟で、値段の低い小型魚を獲らないようにし、資源を合理的に利用します

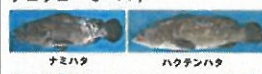
制限体長に満たない魚は、獲らないでください！



口先から尾の切れ込みまでを測ります

制限体長 20 cm

白魚類 (フエフキダイ科メイチダイ属)




タマン類 (フエフキダイ科フエフキダイ属)



2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海事 部門

氏名又は 団体名称	やなぎはら りょうへい 柳原 良平	年齢	81	
所属	イラストレーター			
功績の概要	親しみやすい作品による海事思想の普及			

功 績 事 項

1. 寿屋(現サントリー)の宣伝部でトリスウイスキーのCMを制作し、氏の描いたCMキャラクターのアンクルトリスが人気となり、毎日産業デザイン賞、電通賞などを受賞。1959年サントリー退社後は、船や港をテーマとした「良平の船の博物館」、「良平の東京湾みなとスケッチ」、「船キチの航跡」などの著作を多く発表するほか、海上コンテナのキャラクターマーク、船のデザイン、カラーリングなどを手掛けた。
2. 一般向けの海・船の本を多く執筆するだけでなく、その優しいタッチから子ども向けの絵本も多く手がけている。日本ではあまり親しまれていない多数の船舶をイラストつきの情報で紹介し、日本において船舶に対する関心呼び起こすきっかけとなった。
3. その功績により、商船三井、佐渡汽船、太平洋フェリー、東海汽船の海運各社から名誉船長の称号を贈られている。商船三井では同社のコンテナ船の「アリゲータ」マークをデザインしているほか、同社のWEBサイトのページには同氏のイラストが紹介されている。また、東海汽船では高速船「アルバトロス」のデザインを担当し、さらに超高速ジェット船「セブンアイランド(愛・虹・夢・友)」の命名並びにデザインを担当した。
4. 一般国民にとって馴染みの薄い船舶を、独特の明るく親しみやすいイラストを駆使して一般国民にアピールし続ける氏の活動は、海や船の広報活動に多大な貢献をしている。

